

# 頼山陽と下関の商人広江殿峰

谷 口 匡

## 1. はじめに

頼山陽（安永9年・1780～天保3年・1832）は生涯に下関を2度訪れた。父春水の三回忌の法要に出席するため、広島に帰省し、その足で九州への大旅行に出発した時に、旅次、立ち寄ったのが1度めである。それは文政元年3月14日のことであって、木崎好尚『頼山陽全伝』（木崎好尚・頼成一編『頼山陽全書』頼山陽遺蹟顕彰会、1931～32年、所収。以下『全伝』と略記。）のその日の記事に「下ノ関着。広江殿峰の宅に入り滞留。〔4月23日迄〕」とある。2度めは九州旅行からの帰さ、再度、通りかかった折で、文政元年12月（日付は不明）である。『全伝』の文政元年「12月 日」に「下ノ関に入り、再び広江家に入る。」という記載が見える（日付が空白になっているのは原文のままで日付不明のもの。以下同じ）。

一見してわかるように、山陽は2度の下関訪問においていずれも広江殿峰の家に滞在している。1度目は3月14日から4月23日までの1か月以上にわたり、2度目は12月に来たが「広江家にて越年」（『全伝』文政元年12月30日）し、滞留は翌文政2年正月に及んだ。

2度の滞在の間、山陽はずっと広江家にいたわけではなかった。1度目、2度目ともに下関滞在中に、長府の小田南畷宅にも泊まりに行った記載が『全伝』にはある。しかし広江殿峰は下関滞在中の山陽が、経済的にもまた精神的にも最も頼りにした人物であった。

本稿は山陽が残した詩文と『全伝』などを主な資料として、彼と広江殿峰との下関での交遊の様子について概略を窺うことを目的とする（注1）。

## 2. 広江殿峰の生涯と人となり

広江殿峰は諱を為盛、字を文竜、通称を吉右衛門という。宝暦6年（1756）、周防富田の藤井家に生まれ、のち、西細江町で醤油の醸造をしていた広江家の養嗣子になった。その屋号を伊予屋といい、殿峰は4代目にあたる。文政5年（1822）9月、67歳で死去した。彼は勤勉実直な商人であるとともに、画や篆刻を得意とする多才な人物で、特に篆刻については『西江堂印譜』一卷がある（注2）。また、文人墨客と交わることを好み、当時の交通の要衝下関にあって、殿峰の家はしばしば彼らの宿となった。そして山陽もその恩恵に与った一人であった。

山陽は殿峰の為に、その一生の事績を「広江殿峰翁墓碣」に書いている。墓碣は下関市豊前田町1-1-6の光禅寺墓域に現存する。また付近に「広江殿峰宅址」の石碑が立ち、山陽が逗留したという殿峰の家がそこにあったことが知られる（31頁写真参照）。

山陽の手になる「広江殿峰翁墓碣」は次のようなものである。以下に現存する碑に基づいて原文とその訓読・口語訳を示す。

赤馬關當西道襟喉、海陸商旅所輻湊。而廣江翁獨以風流知名海內。凡載筆橐研而東西行者、自挾一技以上、莫不館於翁。余意翁特自喜者耳。及西遊、往來主翁家、然後知向淺視之也。翁雖汎容衆、其中有所鑒別。家不甚富、而憐才獎能、卹其窮困。其自奉朴素、日着粗布蔽膝、裸奴僕理事。事畢輒抵客室、談笑應酬、客安之。留滯動涉旬月、而其妻孥亦不之厭也。余聞翁嘗以孝蒙其藩旌賞。事在享和癸亥云。蓋其仰事俯育、備有條理、本之以誠、施及交游、無新舊、皆得其歡心。世學者往往以文與行爲二途、甚至以好事廢務敗產。聞翁之風、寧能無愧。余與翁別三年、而得翁訃。實文政壬午九月六日。享年六十七。葬邑興禪寺。翁諱爲盛、字文龍、號殿峰、通稱吉右衛門。配三輪氏生三男一女。長男爲禎仲爲尚皆先死。季鐘。女適邑中野某。又一女妾出在家。鐘好學、從余游。今爲嗣以書來請曰、先子在時每言、吾所閱人遍天下、晚乃得識頼君。則先生宜銘其墓矣。翁多技能、善畫、多從學者。又善刻印、公卿侯伯徵其篆雕。世多知者、故不著。著其尤大而人不及知者。遂銘之曰、

翁在時書月一臻。因憶嘗觀翁座間、四方文翰與米塩之籍、委如魚鱗、了有次第。拮据昏晨、人謂之敏、余服其篤所以能孚於衆。況於骨肉。展此墓者、不亶乃子孫。余知人過關者、必拜且泫然也。

友人藝國頼襄撰并書。孤子鐘建。

(訓 読)

赤馬関は西道の襟喉に当たり、海陸の商旅の輻湊する所なり。而して広江翁独り風流を以つて名を海内に知らる。凡そ筆を載せ研を橐み東西に行く者の、一芸を挟むより以上は、翁に館らざるもの莫し。余意えらく翁はただ自ら喜ぶ者なるのみと。西遊し、往來、翁の家に主るに及んで、然る後に向にこれを淺視するを知る也。翁汎く衆を容ると雖も、その中に鑑別する所有り。家甚だしくは富まずして、而も才を憐れみ能を奨め、その窮困せるを卹う。その自奉すること朴素にして、日に粗布蔽膝を着け、奴僕に裸って事を理む。事畢れば輒ち客室に抵つて、談笑応酬し、客これに安んず。留滯すること動もすれば旬月に渉るも、その妻孥もまたこれを厭わざる也。余聞く翁嘗て孝を以つてその藩の旌賞を蒙ると。事、享和癸亥に在りと云う。蓋しその仰事俯育、備わつて条理有り、これに本づくに誠を以つてし、施いて交游に及び、新旧と無く、皆その歡心を得ればなり。世の学者、往往にして文と行いとを以つて二途と爲す。甚だしきは事を好むを以つて務めを廢し産を敗るに至る。翁の風を聞けば、寧んぞ能く愧ずること無からんや。余、翁と別るること三年にして、翁の訃を得たり。実に文政壬午九月六日なり。享年六十七。邑の興禪寺に葬る。翁、諱は爲盛、字は文竜、殿峰と号し、通称は吉右衛門。配三輪氏、三男一女を生む。長男爲禎・仲爲尚、皆先んじて死す。季は鐘。女、邑の中野某に適ぎ、又一女、妾出して家に在り。鐘、学を好んで、余に従つて遊ぶ。今、嗣と爲り書を以つて來り請うて曰わく、「先子在りし時毎に言う、吾閱する所の人、天下に遍く、晩には乃ち頼君を識るを得たり。則ち先生宜しくその墓に銘すべし」と。翁技能多く、画を善くし、従つて学ぶ者多し。又刻印を善くし、公卿侯伯、その篆雕を徵む。世に知る者多き故に著さず。その尤も大にして、人の知るに及ばざる者を著す。遂にこれに銘して曰わく、翁在りし時、書、月に一たび臻る。因つて憶う、翁の座間を觀るに、四方の文翰と、米塩の籍と、

委もること魚鱗の如く、了に次第有り。拮据すること昏晨、人これを敏なりと謂い、余その篤きに服す。能く衆を孚む所以なり。況んや骨肉においてをや。此の墓を展する者は、亶だ乃の子孫のみならず。余、人の関に過る者、必ず拝して且く泣然たるを知る也。

友人、芸国、頼襄撰並びに書。孤子鐘建つ。

(口語訳)

下関は九州に通ずる要所に位置し、海と陸の商人や旅人が集まってくる所である。そして江戸翁は風流という一点によってその名を全国に知られている。筆や硯を携えて東西を旅する人で、一芸に秀でた者なら、翁の家を宿としたことのない人はいない。私は翁はただそれで得意がっていたのだと思っていた。しかし西方に旅をし、その行き帰りに、翁の家に泊まるに及んで、これまで翁を見損なっていたことがわかった。翁は大勢の人々を受け入れてはいたが、ちゃんとそれは弁別されたものだったのである。家が大して裕福なわけではないのに、才能ある者を惜しみ、能力ある者を励まし、彼らの貧困に対して援助した。自分の生活に関しては質素であって、いつも粗末な布の前垂れをつけ、奴僕に交じって仕事に従事した。仕事が終わると客が泊まっている部屋に行って、談笑して客をもてなし、客はそれに満足した。客の滞在はしばしば1か月に及んだが、その妻や子もそれを嫌がらなかった。私は翁が以前、孝行によって藩から表彰されたと聞いている。それは、享和3年のことだという。思うにその父母に仕え、妻子を養うやり方が、行き届いて筋が通っており、その根本が真心から出ている、それがついには交遊にも及び、新知と旧知とを問わず、人々から喜ばれたからであろう。世間の学者は、往々にして文学芸術と仕事とが別々の道であると考えている。物好きが高じた結果、仕事を怠って破産するに至ることさえある。そうした人たちは翁の様子を聞けば恥じないであろうか。私は翁と別れて3年経ってから、翁の訃報に接した。文政5年9月6日のことである。享年67歳。村の興禅寺に埋葬した。翁は、本名を為盛、字を文竜といい、殿峰と号し、通称を吉右衛門をいった。妻の三輪氏は、三男一女を生んだ。長男の為禎と次男の為尚は、いずれも翁より先に亡くなった。末子は鐘という。娘は村の中野なにがしに嫁ぎ、もう1人の娘はめかけ腹で、家にいた。鐘は、学問を好み、私の塾に遊学した。今、後継ぎとなって、手紙を携えてやってきて、「亡父が生きていた時、私が交わった人は全国各地に及んでいるが、あとになって頼君と知り合いになれた。よって先生がその墓に文章を書かれるのがふさわしいといつも申しました」と依頼した。翁は多芸であって、画がうまく、翁について学ぶ者が大勢いた。また印刻に長じ、公家や大名から篆刻を求められた。こうしたことは世間によく知られているので記さない。最も重要で、人に知られていない事柄を記しておく。かくて銘に言う、

「翁の生前、手紙は月に1度きた。よって思い出す、翁の居間を見ると、全国からの書簡と、日々の帳簿とが、魚の鱗のように夥しく積まれていたが、ちゃんと順番になっていたことを。朝から晩まで辛苦して働き、人はそれを勤勉だと言い、私はその誠実さに敬服する。だから人々の面倒をよく見られたのだ。肉親に対しては言うまでもない。この墓に参るのは、あなたの子孫だけではない。下関を通る者は、必ずあなたの墓に参拝して暫しはらはらと涙を流すだろう」。

友人である、安芸国の、頼襄が文を作り、かつこれを書く。父を失った子の鐘がこの墓碣を

建てる。

『下関の記念碑（旧市内篇）』（下関市教育委員会、1986年）にはこの墓碣碑を写真入りで紹介しているが、そこに「碑文」として引かれているものは前掲の文とは異なっている。それは『遺稿』巻4に収める「広江殿峰翁墓碣」と一致する。また『頼山陽文集』（『頼山陽全書』所収。以下『文集』と略記。）では巻9に載せる2種類の「広江殿峰翁墓碣」のうち最初の方のものであって、すなわち後に山陽が修正を加えた文章である。前掲の、現存する碑石の原文は『文集』であとの方に載せる、〔初稿〕と注記のあるものとほぼ一致する。

碑の原文（初稿）と『遺稿』とを比較すると、全体にわたってかなりの修正はあるが、特別に新しい事実が付け加えられたということはない。本来、修正された『遺稿』の方を取り上げるべきかもしれないが、その本文については前掲『下関の記念碑』や『文集』などについて見られたい。

### 3. 山陽と殿峰の出会い

山陽は殿峰とどのようなきっかけで出会ったのか。

『下関市史』には「文政元年（1818）3月、門人後藤松陰をつれて西遊の時、長府の旧友小田南咳宅に宿泊3日ののち、14日、広江殿峰の宅に入った。殿峰は渡辺東里、在関中の甲原柳庵、女婿山名喜兵衛（船木屋一俳人）を集めて歓談し、山陽の滞留は40日に及んだ。殿峰は文化5年（1808）に自刻の銅印を贈ったことがあり、秋水は山陽と師弟の間柄であったので、歓待これ努めた。銅印贈与というのは、長府の藩儒白杵太仲が芸備地方を旅行して、山陽に会った際、太仲が持っていた銅印を見た山陽が、殿峰へ執成しを頼んだことによるのである」と述べている（313頁）。

ここに言う銅印贈与については、山陽に「赤間關人廣江殿峰贈銅印其自刻云（赤間関の人広江殿峰、銅印を贈る。其れ自ら刻すと云う）」（『詩集』巻5。文化6年作）と題する詩がある。

沈沙折戟千年在 沈沙 折戟 千年在り、  
化爲篆刀刀色寒 化して篆刀と為って刀色寒し。  
多謝一揮援我陣 多謝す一たび揮えば我が陣を援け、  
能令赤幟照文壇 能く赤幟をして文壇を照らさしむるを。

詩の大意は、「水辺の砂地に千年の間うずもれていた折れた矛が、いつの間にか寒々と光る印刀と化している。／あなたがその印刀で作ってくれた印の威力は抜群で、私が一筆振るうたびに、真っ赤な色で私の文筆活動を助けてくれる」というくらいであろうか。

「折戟 砂に沈んで鉄未だ銷せず」と歌う杜牧の「赤壁」の詩を踏まえた作品である。但し「赤幟」は赤壁の故事から来るのではなく、この詩では赤い旗をかかげて源氏と壇ノ浦で戦った平家を指すのであろう。平家は源氏に敗れて海の藻屑となってしまったけれども、赤間宮は平氏とともに海に沈んだ安徳帝を祭神とし、平家一門の墓もある。そこに祭られている平家の霊が見守っていてくれる、という意にとれる。

山陽が下関に来た時歓待に努めたという秋水は殿峰の三男で、前掲の「墓碕」に現れる鐘のことである。字は大声または子遠、通称を常蔵といい、秋水と号した。彼は文化の初年熊本の高木紫溟に学び、そこで田能村竹田を知り、竹田の紹介で山陽の門に入った（注3）。

山陽が京都で塾を開いたのは文化8年である（注4）。秋水がいつ入塾したのかはわからないが、『全伝』文化11年「6月 日」に、「[立秋]。武元北林、京都より帰郷の途、兄登々庵、及び山陽塾の広江秋水等に見送られ、伏見豊後橋の旅館に一泊」と見えるから、この時には山陽の塾生であった。しかし同年11月30日の『全伝』に、「在京の広江秋水、その長兄九隣〔名為植・字孟祥。称久太郎—38歳〕が、去る4日、下ノ関の家にて死去につき、帰郷の途……」とあって、兄の死とともに下関に戻ったので、山陽の塾生であった期間は短かった。

いずれにしても、秋水の入塾は銅印贈与より後であって、殿峰は秋水を通して山陽を知ったのではないであろう。偶然の機会に殿峰の銅印を見た山陽が、臼杵太仲を通して自分にも銅印を刻するように殿峰に依頼し、そのことがきっかけとなって2人の交遊が始まったのではないかと想像される。

#### 4. 下関での山陽と殿峰

下関での2人の交遊のさまを、山陽が作った詩によって窺ってみよう。

上述したように、山陽は九州旅行への行きがけ、文政元年3月14日に下関の殿峰の家に入った。広江家では富士登山のために東上の道中にあった旧知の僧侶大含禪師（雲華上人）と逢い、3月24日、ともに阿弥陀寺の先帝会せんていゑを拝観している。この時、山陽らを案内した一人が広江秋水であった（注5）。

大含禪師は画人でもあり、蘭を得意とした。山陽は禪師より蘭の画をもらった時、それに題した詩を殿峰に与えた（「題大含禪師画蘭似東道殿峰老人」、『詩集』巻11）（注6）。

そして4月24日、一旦、殿峰とは別れて、いよいよ九州へと旅立つ。出立にあたって、山陽は近作の絶句12首を書き留めて殿峰に贈っている。『全伝』文政元年4月24日に、「22日出立、小倉へ向ふべき予定、この日に延期。近作十二絶を揮毫して広江家に留贈す、その一首」とあり、そのうちの1首を録する。次に掲げる「寓廣江氏二句臨別録近製十二絶留贈主人翁其一（広江氏に寓すること二句、別れに臨んで近製の十二絶を録し、留めて主人の翁に贈る 其の一）」（『詩集』巻11）がそれである。

萍跡悠悠赤馬関	萍跡悠悠たり赤馬関、
登高聊復餞春還	登高聊か復た春を餞って還る。
中原一髮青何在	中原一髮青何くにか在る、
眼盡天低鶻沒間	眼は尺く天低れ鶻の没する間。

詩の大意は「私のあてのない旅路ははるか遠く下関まで至り、小高い山に登って暫く酒宴を催して帰って来た。／東坡が歌った『広い海面の上に一すじの髪のように青く見える中国本土』はどこにあるのだろうと、空のはてのはやぶさの飛ぶ影が隠れるあたりにじっと目をこらした」というものである。これは蘇軾の詩「澄邁驛の通潮閣二首」の第二首を踏まえる。

また同じ日に「發赤關留別廣江父子（赤關あかまがせきを發して廣江父子に留別す）」（『詩鈔』卷3、『詩集』卷11）の詩も作って別れを惜しんでいる。

潮聲交急艫 潮聲きゅうろ急艫に交わり、  
日色動高桅 日色こうき高桅に動く。  
一葦乘晴日 一葦いちい晴日に乗じて、  
三行覆別杯 三行さんこう別杯くつがを覆えす。  
山陽背指極 山陽はいし背指して極きわまり、  
鎮右迎顔開 鎮右ちんゆう迎顔げいがんして開く。  
唯有故人意 唯だ故人の意有り、  
依依過海來 依依として海を過ぎて來たる。

「うしおの響きが急ピッチに舟を漕ぐ櫓の音とまざりあい、高い帆柱に当たった日差しが舟の振動のために揺れて見える。／晴れた日を選んで1本の葦のような小舟を浮かべ、別れの杯が三巡したところで出発する。／振り返って見れば山陽道の陸地も尽きて見えなくなろうとしており、代わりに九州の風景が私を迎えて広がっている。／そうしてただ古い友人の熱い気持ちだけが、離れがたく海峡を渡ってついてくる」というのがその大意だが、詩には九州の旅への期待と同時に、殿峰・秋水親子に対する惜別の情がにじんでいる。

九州の旅を終えて再び山陽が下関に戻って來たのは文政元年12月のことだった。『全伝』「12月 日」の記載に「大里より發船、下ノ関へ向ふ」とある。大里だいりとは現在の北九州市門司区の地名である。次の「北渡再投廣江氏（北渡して再び廣江氏に投ず）」（『詩集』卷12）の詩は大里から下関に向かう船の上で作られたものであろう。

人烟萬戸擁潮橫 人烟じんえん萬戸ばんこ潮うしおを擁いだいて横たわり、  
遙認君家高樹明 遙かに認む君が家の高樹こうじゆ明らかなるを。  
未繫歸舟心已醉 未だ歸舟を繫つながざるに心すて已に酔い、  
預知家釀待吾傾 預知かじょうす家釀 吾を待つて傾くを。

その大意は「かまどから煙の立ちのぼる多くの人家が海峡をとり囲むように建つ中に、高い樹木のあるあなたの家がひとときわ明るく遠くから眺められる。／私は帰航する舟を岸につなぐ前から酔った気分浸って、あなたが自家製のありったけの酒で歓待してくれるのを想像している」というものであって、殿峰との再会を前にした躍動するような心情が伝わってくる。

山陽に本物の酒の味を覚えさせたのは殿峰であったと思われる。「書赤關竹枝稿本後（赤關竹枝の稿本の後に書す）」（『文集』外集）に、「余始め飲を解せず。赤關に洋〔撰津灘〕の酒の鶴と単呼する者有り、甚だ勁し。余、一たび嚙んで、その氣、齊ほぞに徹するを覚ゆ。是れより日として飲まざる無く、飲んで酔わざる無し（余始不解飲。赤關有洋〔攝津灘〕酒單呼鶴者、甚勁。余一嚙、覺其氣徹于齊。自是無日不飲。無飲不酔）」といい、また「戯れに赤關竹枝を作る」（『詩鈔』卷3、『詩集』卷11）の1首に「清醪 尤も推す鶴字號、人を酔夢にの駕せて揚州に上らしむ（清醪尤推鶴字號、駕人酔夢上揚州）」とあるのからも、下関に來て灘の酒の味を知ったのがわかる。そして最も多く酒の相手をしたのは殿峰だったに違いない。2度目の來関の折、文政元年12月に作られた「題廣江氏梅月樓（廣江氏の梅月樓に題す）」（『詩鈔』卷4、『詩集』

卷12) の詩に次のように歌うことでもそれは窺える。

重 寓 如 歸 忘 客 情	重 寓 歸 る が 如 く 客 情 を 忘 れ、
全 家 迎 笑 面 非 生	全 家 迎 笑 面 生 に 非 ず。
三 杯 暮 醉 如 條 例	三 杯 暮 醉 条 例 の 如 く、
一 被 朝 眠 亦 課 程	一 被 朝 眠 亦 た 課 程。
食 豈 無 魚 荷 汝 意	食 は 豈 に 魚 無 から ん や 汝 の 意 を 荷 す、
天 猶 有 雨 滯 吾 行	天 は 猶 お 雨 有 り て 吾 が 行 を 滯 ら し む。
具 舟 門 外 寧 多 日	舟 を 門 外 に 具 う る 事 寧 に 多 日 な ら ん や、
連 夜 何 妨 執 短 檠	連 夜 何 ぞ 妨 げ ん 短 檠 を 執 る を。

ここに歌われるのは「再びの仮住まいはまるで家に帰ったかのようで旅の身にあることを忘れ、全員に笑顔で迎えられ1人として見知らぬ人はいない。夕方になると決まって3杯の酒をひっかけては、いつもあなたと同じ布団で朝まで眠っている。毎日の魚つきのご馳走にはあなたの厚意に感謝し、このところ雨が降るのは私の出立を遅らせようとするかのようだ。あと何日かで門の外に舟を出して出発しなければならないが、それまでは毎晩、誰にもじゃまされず、燭台のもとであなたと語り合うだろう」といった、2人の文字通り寝食をともにした交遊である。

そうした中で山陽が捻った詩にはなかなかの力作がある。次の「廣江文龍家老松樹歌（広江文竜の家の老松樹の歌）」(『詩集』巻12)も文政元年12月の作とされる。

君 不 聞 玄 海 有 龍 雌 與 雄	君 聞 か ず や 玄 海 に 竜 有 り 雌 と 雄 と、
雄 在 其 西 雌 在 東	雄 は その 西 に 在 り 雌 は 東 に 在 り。
九 國 路 迂 苦 隔 絕	九 国 道 迂 く し て 苦 だ 隔 絶 し、
耦 爪 擘 開 地 嵌 空	耦 爪 擘 き 開 い て 地 嵌 空。
穴 門 潮 汐 萬 船 聚	穴 門 の 潮 汐 万 船 聚 ま り、
誰 知 兩 龍 奪 禹 功	誰 か 知 ら ん 兩 竜 禹 の 功 を 奪 う を。
功 成 酣 睡 三 千 歲	功 成 り 酣 睡 す る 事 三 千 歳、
一 化 爲 松 一 爲 翁	一 は 化 し て 松 と 為 り 一 は 翁 と 為 る。
白 髮 蒼 顏 古 仙 貌	白 髮 蒼 顏 古 仙 の 貌、
聲 如 吟 吼 光 雙 瞳	声 は 吟 吼 す る が 如 く 双 瞳 光 る。
自 號 文 龍 人 不 識	自 ら 文 龍 と 号 し て 人 識 ら ず、
獨 有 老 松 託 同 宮	独 り 老 松 の 同 宮 に 託 す る 有 り。
鱗 甲 剝 落 如 積 鐵	鱗 甲 剝 落 し て 積 鉄 の 如 く、
頭 角 衝 雲 亂 綠 髮	頭 角 雲 を 衝 い て 緑 髮 乱 る。
槎 牙 吾 見 其 嫵 媚	槎 牙 と し て 吾 そ の 嫵 媚 な る を 見、
撫 汝 盤 桓 夙 緣 通	汝 を 撫 し 盤 桓 と し て 夙 緣 通 ず。
赤 關 萬 家 隱 海 霧	赤 關 の 万 家 海 霧 に 隠 れ、
遙 見 一 株 碧 葱 龍	遙 か に 見 る 一 株 碧 に し て 葱 龍 た る を。
翁 也 愛 客 今 陳 鄭	翁 や 客 を 愛 す 今 の 陳 鄭、

幾人認松維舟篷  
仙眼潛閱來往客  
欲傳仙訣總如聾  
頼子來遊兩投轄  
一醉高枕松陰中  
夢見松精詳宿昔  
果然文龍非裸蟲  
詰翁翁罵松饒舌  
松聲如笑驪海風

幾人か松を認めて舟篷を維ぐ。  
仙眼潜かに閱す來往の客、  
仙訣を伝えんと欲すれども総て聾の如し。  
頼子來遊して兩たび投轄し、  
一醉 枕を高くす松陰の中。  
夢に松精を見て宿昔を詳らかにすれば、  
果して然り文龍は裸虫に非ず。  
翁を詰れば翁は罵る松饒舌なりと、  
松聲笑うが如く海風を驪す。

詩は殿峰の字・文龍にひっかけて彼を竜の化身に見立てたもので、やや意味の取りにくいところがあるが、試みに次のように訳してみる。

「君は聞いているだろう、玄界灘に雌雄の竜がいて、雄は西に雌は東にいるということ。／九州までの道のりは遠く隔たり、2つの爪に引き裂かれて穴があいている。／穴の入り口の海にはあまたの船が集まっているが、2つの竜が禹にとって代ってこの治水の功績をなし遂げたとは誰も知らない。／功成つてのち熟睡すること三千年のうちに、1つの竜は松に変化しよう1つは老人になった。／老人は白髪頭に青黒い顔色をして昔の仙人の風貌であり、うなるような声をし、両眼を光らせている。／自ら文龍と号しているが誰にも知られず、古い松の木だけが老人の家に寄り添って立っている。松の樹皮は剝がれ落ちて鉄を堆積してようになっており、天辺は雲に向かって突き出て松葉が茂り放題になっている。／不揃いに枝の伸びたその姿に私は愛らしさを覚え、おまえを撫でては立ち去りがたく前世からの因縁が通っているのを感じる。／下関の家という家は海に立ちこめる霧の中に隠れているが、青々とした1本の樹木が遙か遠くに見える。／老人の客好きはまるで漢の陳遵が今に生きているようで、これまで何人がこの松を目印に舟を繋いだことだろう。／老人は仙人のまなざしで來往する客をそっと観察しては、仙術の奥義を伝えようとするが、みな聞こえていないかのようだ。／私がやって来たところ老人は車軸のくさびを2度とも井戸に捨てて帰れないようにし、酒を酌み交わして松の木陰でのんびりと眠った。／すると夢に松の妖精が出てきて老人の過去を明らかにし、思った通り文龍は人間ではなかった。／老人にそうなのかと詰問すると彼はお喋りな松めと声を荒げたが、松の木はそれを笑うかのように海風に吹かれて鳴っている」。

なお23句目に見える「轄」とは車軸の末端に差し込んで、車輪が脱落しないようにするくさびであって、「投轄」は漢の陳遵が大変客を好み、賓客が大勢やってくるといつも客の車の轄を井戸に放り込んですぐに立ち去れないようにした故事（『漢書』游侠伝）に拠る。とすれば19句目「陳鄭」は「陳遵」の誤りではなかろうか。ここでは陳遵として解した。また27句目「饒舌」は、唐代の僧・寒山と捨得が自分たちの存在を他人に教えた豊干のことを「饒舌」と言った故事（『宋高僧伝』封干師伝などに見える）を踏まえたものであろう。

明けて文政2年1月、『全伝』正月元日の記事に「下ノ関、広江殿峰宅にて、『赤間関下又迎年。』の句あり。又『歳除紀実』の詩を、新たに還つた端研のつかひ始めに揮毫を試み、秋水に与ふ、同じく「正月 日」に「殿峰の爲めに、『清嘯書楼』の扁字を書す」など山陽と殿峰・

秋水親子との交流はいよいよ密である。しかし山陽が下関を発つ時が来る。『全伝』の「正月日」に「下ノ関発船、上ノ関に向ふ。殿峰父子への留別短古に『雪消檣竿閃暎紅。短檣去乗料峭風』の句あり」。文中の「留別短古」とは「發赤關別廣江父子作歌（赤関を發して広江父子に別れ歌を作る）」（『詩鈔』卷4）という以下の詩である。

雪消檣竿閃暎紅	雪消えて檣竿に暎紅閃き、
短檣去乗料峭風	短檣去って乗る料峭の風。
沙際回看君佇立	沙際回り看れば君佇立し、
影没厓渚轉曲中	影は没す厓渚轉曲の中。
騎歲淹留情難割	騎歲淹留して情割き難く、
離岸後期眞遼闊	岸を離れて後期眞に遼闊。
相呼猶欲叙心緒	相呼んで猶お心緒を叙べんと欲するも、
無奈檣聲亂人語	奈ともする無し檣聲 人語を乱すを。

「雪が消えて帆柱には朝日がきらめき、私の小さな舟は肌を刺す風に乗って岸を遠ざかる。／砂州の方を振り返って見るとあなたはじっとたたずんでいるが、その影も舟が水路を曲がって進むうちに水辺に没してしまった。／年をまたがってあなたの家に長くどまったので離れ離れになりたくないが、舟が岸を離れてしまえば後日の再会はいつともわからぬ。／呼びかけて別れ難い気持ちを伝えようとしても、その声は檣の音にかき消されて届きようもない」というのがその大意である。

また別れに際して、殿峰の三男秋水が書斎の花瓶を餞別に贈ってくれた。そこで次の詩「廣江大聲取齋中花瓶爲贖（広江大声、齋中の花瓶を取って贖と為す）」（『詩集』卷12）もある。

膽様銅餅古色蒼	胆様の銅餅 古色蒼たり、
和花輟贈送歸帆	花を和して輟贈し帰帆を送る。
殷勤着看柁樓底	殷勤に着看す柁樓の底、
猶帶君家窓裡香	猶お帶ぶ君の家の窓裡の香。

「胆を吊るしたような銅製の古色蒼然とした花瓶に、花を生けて餞別とし、あなたは旅立つ舟を見送ってくれた。／操舵室の下でしきりにこの花瓶を愛でていると、まだあなたの家の窓辺の香りが漂ってくる」という、殿峰の家の香りを船上から懐かしむ詩である。

## 5. 殿峰の死とその後

殿峰が亡くなった文政五年に、山陽は彼の肖像画に対する賛辞の詩「殿峰翁像贊（殿峰翁像の贊）」（『詩集』卷15）を作り、その生涯を偲んだ。

詞盟幾處寄郵筒	詞盟幾處か郵筒を寄せし、
赤間關前白首翁	赤間關前の白首翁。
秋兔痕分畫南北	秋兔 痕は分かつ 画の南北、
春鴻跡記客西東	春鴻 跡は記す 客の西東。
肥家不厭牙籌運	肥家 厭わず牙籌の運、

凍石時呈鐵筆工 凍石 時に呈す鉄筆の工。  
 莫恠獨醒投萬轄 あや なか さ ぼんかつ  
 恠しむ莫れ独り醒めて万轄を投ずるを、  
 閱人隻眼不朦朧 人を閱して隻眼朦朧ならず。

これは「いったいどのくらいの文人仲間に、この下関の白髪頭の老人が手紙を出したことだろう。／彼らが筆で画いた絵は南宗画と北宗画の流派に分かれ、東西の旅人のはかない遊歴のあとはなおありありと記憶に残っている。／あなたは自ら算盤をはじいて家を富まし、傍ら自ら時にはろう石に篆刻をしてその腕前を披露してくれた。／皆が酔っている中で独りだけ醒めていて、客人という客人の車の轄を捨てて帰れなくしたが怪しむには及ばない。人を見抜く独特の眼力があって決してぼんやりしていたわけではないのだから」という、商売の傍ら文人との交遊をはなはだ好んだ殿峰の生活ぶりをよく伝えた詩である（注7）。

4句目「春鴻跡」とは、春の雪どけの泥の上についた鴻の爪あと。蘇軾の「子由の灑池懷旧に和す」の詩に「人生到る処知んぬ何にか似たる、<sup>まさ</sup>応に似たるべし飛鴻の雪泥を踏むに。泥上に偶然指爪を留<sup>とど</sup>むるも、鴻飛んでは那ぞ復た東西を計らん」とあるのを踏まえ、人間の行いのはかない喩えに用いられる。

殿峰の死後も、秋水との交わりは続いたようである。『全伝』文政11年「4月 日」に「広江秋水の爲めに淵明石に題する作あり」とあって、すなわち「題石靖節集陶句（石靖節に題す。陶句を集む）」（『遺稿』巻3、『詩集』巻20）という詩を秋水の爲に作った。これには「広江大声、小石の人を肖<sup>かたど</sup>るを得。衣巾面目、頗る画家の伝うる所の陶淵明の像の如し。詩を君夷及び余に索<sup>もと</sup>む。君夷の詩尽くせり。余、言うべき無し。即ち淵明の語を集めて、責めを塞ぐ（廣江大聲得小石肖人。衣巾面目、頗如畫家所傳陶淵明像。索詩於君夷及余。君夷詩盡焉。余無可言。即集淵明語、塞責）」という序がある。つまり秋水が陶淵明によく似た石像を入手した時、田能村竹田と山陽に詩を求めてきた。竹田の詩を見て、それにつけ加える言葉を持たないと感じた山陽は、陶淵明の詩句を集めて次の詩を作ったという。

情通萬里外 情は万里の外に通じ、  
 高操非所攀 高操は攀ずる所に非ず。  
 時時見遺烈 時時 遺烈を見て、  
 我欲觀其人 我 其の人を觀んと欲す。  
 形骸久已化 形骸久しく已に化し、  
 言笑難爲因 言笑 因と爲し難し。  
 一形似有制 一形 制せらるる有るに似て、  
 不知幾何年 知らず幾何の年なるかを。  
 問子爲誰歟 問う子は誰とか爲すと、  
 欲辨已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る。  
 天容自永固 天容 自ら永く固く、  
 靈府長獨閑 靈府 長えに独り閑なり。  
 我心固匪石 我が心固より石に匪ざるも、  
 聊且憑化遷 聊か且く化に憑りて遷らん。

將去扶桑涘	將に扶桑の涘 <small>ほとり</small> に去らんとして、
復得返自然	復た自然に返るを得たり。
語默自異勢	語默 <small>おのづか</small> 自ら勢 <small>こと</small> いを異にするも、
安得不爲歡	安んぞ歡 <small>いず</small> を爲さざるを得んや。
摘我園中蔬	我が園中の蔬 <small>そ</small> を摘み、
淹留忘宵晨	淹留 <small>しゅう</small> して宵晨 <small>しん</small> を忘る。
一觴雖獨進	一觴 <small>いっしょう</small> 独り進むと雖も、
千載乃相關	千載 <small>せんざい</small> 乃ち相 <small>あ</small> い関 <small>か</small> わる。

すべて陶淵明の詩句をつなぎ合わせて作った、いわゆる集句詩であるが、通釈をつけると「心は万里のあなたに通じており、その高潔さは誰にも及ばない。／いつもすばらしい遺業に出会うたび、私はその人に会いたいと思った。／肉体はとうの昔に衰えてしまい、談笑することもあてにできない。／肉体は拘束されているようにも見えて、いったい何歳になるのか想像もつかない。／あなたは誰かと尋ねてみたが、説明しようとしても言葉が出てこない。／有徳の人の立派な風采はそのままずっと変わることなく、精神は永遠に何者にもじゃまされない。／わが心はもちろん変わりはないが、ひとまず今のところは時の流れにまかせて移ろうことしよう。／仙境の水辺に行こうとして、また自由な世界に帰ることができた。／任官と隠退とそれぞれ状況が異なっているが、どうして楽しまずにおれようか。／わが畑の野菜を摘んで来ては、長く居座って時の経つのを忘れる。／杯1つで独酌しているとはいっても、千年後に生きている私と心が通っているのだ」のように、1つの詩として少しの不自然さもなく、山陽がいかに平素から陶詩に親しんでいたかを示している。ともあれこの時は、山陽と秋水は直接会ったわけではなかった。

天保元年6月、母親の病氣を見舞いに広島へ帰ろうとした時にちょうど秋水が京都に来て、2人は16年ぶりに再会する。『全伝』天保元年6月7日に「伏見より夜舟にて下坂、関藤藤陰〔24歳〕随伴。広江秋水、及び児玉旗山・宮原節庵等、舟場まで見送る」とあるのがそうである。その時の詩「庚寅六月省母氏病西下會赤關廣江生來未數日而別（庚寅六月、母氏の病を省かえりみて西下せんとして會たまたま赤關の広江生來る。未だ数日ならずして別わかる）」（『遺稿』巻5、『詩集』巻21）には言う。

十七年間君再來	十七年間君再び <small>きた</small> 来る、
君來吾往每參差	君來り吾往 <small>つね</small> き毎 <small>しんし</small> に參差たり。
平生魚雁無稀闊	平生 <small>ぎょがん</small> 魚雁 <small>きかつ</small> 稀闊なる無きも、
卻向天涯作別離	卻 <small>かえ</small> って天涯 <small>な</small> に向って別離 <small>な</small> を作す。

ここに「17年間のうちにあなたは2度来てくれたが、（この2回以外は）あなたが来れば私は出かけているという具合でいつも会う機会を逸してきた。／普段、手紙の往来はまれでないのに、こうしてまた遠隔の地に出発することで別れ別れにならなければならない」と言うのからすれば17年間のうち2度しか会えなかった。つまり文化11年6月とその16年後のこの時とである。

天保元年の再会の折には、所蔵している画を秋水に見せて批評しあったりもした。次の「觀

藏畫示在塾廣江大聲（藏画を觀て在塾の廣江大聲に示す）」（『遺稿』卷5、『詩集』卷21）の詩からその様子が想像できる。

曾 弃 興 華 暮 色 圖      曾<sup>かつ</sup>て<sup>す</sup>つ興華暮色の図、  
老 縑 暈 墨 苦 糝 糊      老<sup>けん</sup>の<sup>うんぼく</sup>暈墨 苦<sup>はなは</sup>だ<sup>も</sup>糝糊たり。  
今 朝 挂 得 晴 窓 側      今<sup>こんちよう</sup>朝<sup>か</sup>挂<sup>か</sup>け<sup>か</sup>得<sup>か</sup>たり<sup>か</sup>晴<sup>か</sup>窓<sup>か</sup>の<sup>か</sup>側<sup>か</sup>、  
呼 汝 雲 烟 評 有 無      汝<sup>か</sup>を<sup>か</sup>呼<sup>か</sup>ん<sup>か</sup>で<sup>か</sup>雲<sup>か</sup>烟<sup>か</sup> 有<sup>か</sup>無<sup>か</sup>を<sup>か</sup>評<sup>か</sup>す。

「以前しまったまま忘れていた盛興華の『石湖暮色図』を久し振りに眺めてみると、古びた絹の上に墨がにじんで全体が甚だぼんやり霞んでいる。／今朝それを明るい窓辺に掛け、あなたを呼んで画をみながら、あれはある、これはないと批評しあった」という詩で、これは2首あるうちの第1首である。4句目「雲烟」は杜甫の「飲中八仙歌」に張旭の草書を「毫を揮い紙に落せば雲烟の如し」と歌うのに拠り、巧みな筆づかいをいう。山陽が「石湖暮色図」を好んだことは、中村真一郎『頼山陽とその時代 中巻』（中公文庫、1976年）145～146頁に詳しい。

また、第2首には、

盆 蘭 含 露 吐 芳 腴      盆蘭 露を含んで芳腴を吐き、  
壁 畫 映 明 看 染 濡      壁画 明に映じて染濡を見る。  
一 日 晴 窓 清 福 足      一日 晴窓 清福足り、  
當 分 軟 半 與 君 俱      當<sup>まさ</sup>に軟半を分かつて君と俱にすべし。

「鉢植えの蘭がしっとり濡れてかぐわしい香りを発し、壁に掛けた画に明るい光があたって滴のような墨が目鮮やかに見える。／一日、この明るい窓辺には清らかな幸福が満ちているが、あなたとこの気分を半分ずつ分けあいたいものだ」とあって、ここに見られる芸術を介した交遊は、生前の殿峰との関係を彷彿させる。

## 6. 結びに代えて

以上、下関における頼山陽に関して、特に広江殿峰やその子秋水との交遊に焦点をあてて簡単なスケッチを試みてみた。この地では殿峰らのほかに小田南咳とも彼は付き合っているが、南咳については今後の課題としたい。また今回引用したもの以外にも、まだ下関で作られた詩は数多くある。それらの一部はすでに「頼山陽「西遊詩卷」訳注」(一)～(三)（『下関市立大学論集』42巻3号、43巻1～2号、1999年）において紹介したが、残りの詩についても何らかの機会に取り上げたいと思っている。

(注)

- (1) 詩を引用する際の原文は原則として『山陽詩鈔』または『山陽先生遺稿』に拠り、『頼山陽詩集』（『頼山陽全書』所収）でしか見られないものはそれに拠った。それぞれ『詩鈔』『遺稿』『詩集』と略記して巻数を示したが、いずれにも取める場合は両方の巻数を示してある。詩の制作年は『詩集』の編年や『全伝』を参考にした。また、『全伝』その他の文献の引用に関しては旧字体を新字体に、漢数字をアラビア数字に改めた箇所がある。詩の解釈に際しては伊藤靄谿『山陽詩鈔新釈』（山陽詩註刊行会、1942年）、同『山

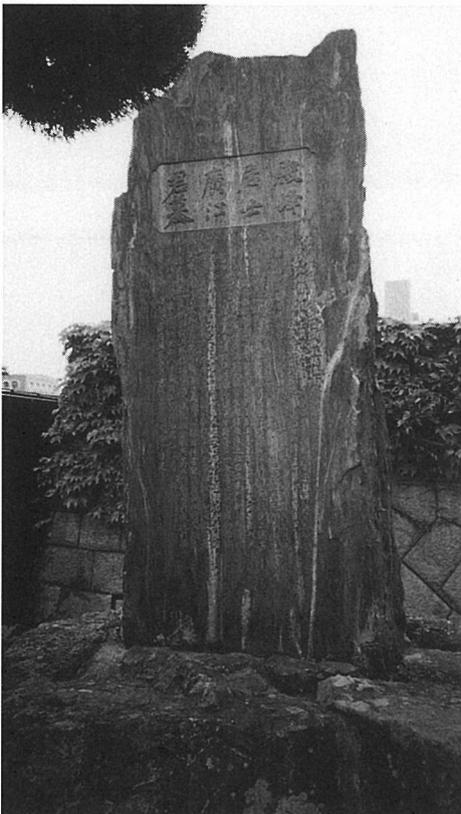
陽遺稿詩註釈』(山陽詩註刊行会、1938年)等を参照した。

- (2) 以上の記述は、下関市市史編集委員会編『下関市史 藩制—明治前期』(下関市役所、1964年)303~304頁による。以下『下関市史』と略記する。なお、「殿峰」はしばしば「殿峯」とも記されるが、本稿では引用も含めてすべて「殿峰」に統一した。
- (3) 『下関市史』304頁。
- (4) 『全伝』文化8年「5月 日」に「もとの新町丸太町上る処に開塾」とある。
- (5) 『全伝』文政元年3月24日に「富士登山の途、来合せた雲華〔四十六歳〕と共に、秋水・甲柳庵等に導かれて、阿弥陀寺の先帝会〔安徳天皇御祭〕拝観」とある。
- (6) 拙稿「頼山陽「西遊詩卷」訳注(一)」(『下関市立大学論集』42巻3号)参照。
- (7) 3句目の「免」を『詩集』は「免」に誤まる。「秋免」は筆の異称。

(附記) 本稿で引用した詩文の一部については明清文人研究会(2002年3月16日)で批正を仰ぎ、更に内山知也筑波大学名誉教授からは全体にわたって貴重なご指摘を賜った。記して深く感謝する次第である。



広江殿峰宅址



広江殿峰翁墓碣



広江家の墓。中央が殿峰、手前が秋水のもの。